

## フォーラム

### ラテンアメリカ研究のグローバル化と東アジア

浜口 伸明 (神戸大学経済経営研究所教授)

2017年1月7日に、神戸大学で少し変わった嗜好のセミナーを開催した。その名を「東アジアラテンアメリカ研究ネットワーク」(East Asian Network of Latin American Studies - EANLAS)という。この着想に至ったきっかけは、2014年12月に韓国ラテンアメリカ学会(LASAK)に招待されたときに、啓明大学のパク・ユンジョさんと、私とともに北京大学から招待されていた郭浩さんのあいだで、日中韓のラテンアメリカ研究者の交流を継続するアイデアを話し合ったことにある。私の在外研究期間があったためすぐ実現しなかったが、郭さんの骨折りで2016年7月に、日本から岡田勇さん、村上善道さんにも参加してもらって、北京大学で第1回セミナーを開催した。これが参加者のあいだで非常に好評だったので、間髪をいれずに2回目を開催しようということになり、私がホスト役をお引受けしてEANLASの神戸セミナーを開催したというわけだ。

ラテンアメリカに関する共同研究といっても、じつは飛行機で数時間のところに同じような関心をもった研究者が少なからずいることを意識したことがなかった。よく考えればこれはもったいないことだ。中国はラテンアメリカとの関係が急速に強まっていて研究者も元気だし、韓国ではLASAKがAsian Journal of Latin American Studiesという英文学術雑誌を四半期で刊行してがんばっている。日本の研究者はこういう動きに目を向けたほうがよい。

また、神戸セミナーには、たまたまその時期にアジアを歴訪することを計画していた米国ラテンアメリカ学会(LASA)のアルド・パンフィッチ副会長をはじめ幹部スタッフが飛び入り参加することになり、参加者のモチベーションがさらに高まった。パンフィッチさんはペルー・カトリック大学の教員であり、米国を拠点としない研究者として初めてLASAの会長に就任することが決まっているということもあって、ラテンアメリカ研究のグローバル化に強い意欲を示している。米州以外からLASAに参加する研究者をこれまで以上に増やすことだけでなく、欧州やアジアで年次大会を開催することも企画しているらしい。

グローバル化といったときに、2つのことが思い浮かぶ。ひとつは、これまで各国で組織化されていた研究者が、同じ組織の傘の下に集合し、共通の枠組みで研究成果を競うというものだ。すでに経済学では、査読付国際学術誌に論文が掲載されることで研究業績が評価されるシステムができあがっている。確かに競争は研究の進歩を刺激するが、主流とされる分析枠組みがある程度確立してしまうと、そこから外れた研究は弾き飛ばされることは問題だ。

もうひとつのグローバル化のあり方は、これまでばらばらに各地で行われていたラテンアメリカ研究をネットワーク化していくというものだ。LASAがグローバル化というのは、もちろん前者のタイプの世界統一を考えているわけではなく、後者のネットワーク型のニュアンスである。地域によってラテンアメリカに関心をもつ文化的・歴史的な背景も、価値の尺度も異なるので、ネットワーク化することでラテンアメリカ研究に多様性が広がるのが期待できるが、互いの違いばかりが強調されて共通の土俵に乗らなければ、学術としての進歩はあまり期待できないかもしれない。

そこで、EANLAS神戸セミナー以来、ブラジルから招いたジョアン・カルロス・フェラスさんが私に言った「こういう試みは面白いと思うけど、アジアのラテンアメリカ研究っていったい何なんだい」というコメントについて考えている。市場経済、経済発展、民主主義、政府の役割などについて、おそらく私たちは無意識にラテンアメリカの人々と異なる価値基準で考えている。そういうことはある程度アジアで共通のものがあるのではないか。このあたりを体系化できれば面白いし、ラテンアメリカ研究のグローバル化にも貢献できるかもしれない。EANLASがそういう場として育っていくことを期待している。